

先端基礎研究センターへの期待 —ステルスと香水—

上塚 寛

Hiroshi Uetsuka

原子力科学研究所長

Director General of Nuclear Science Research Institute



1990年代をピークに我が国の経済活動（経済力）は長期衰退期に入ったとの見方がある。少子高齢化の傾向や国の巨額財政赤字などの現実を直視すれば疑問を挟む余地はないように思える。このような国家的危機感の反映として、イノベーション創出の源泉となる基礎科学への期待が高まっており、文部科学省の基礎科学力強化委員会の提言に於いても『国家の最重要戦略として科学技術振興に社会総がかりで強力に取り組むことが必要である』との基本的考え方が示されている。国の研究開発法人は、「社会総がかり」の最前線で牽引役としての重い役目を担っており、原子力機構も例外ではない。

航空自衛隊の次期主力戦闘機についてのニュースの中でステルス戦闘機 F22 という機種名を時々耳にする。戦闘機に関心はないが、ステルスという単語は「東海研ステルス説」を連想させるので少々耳障りである。言わずもがなの解説をすると、原子力科学研究所（旧原研東海研究所）における研究開発活動全般が外部からよく見えないので、ステルスと揶揄されるのである。多くの関係者の努力の結果、最近 J-PARC が広く認知されるようになり、J-PARC 関連の活動は外部からもよく見えるようになったと思う。しかし、原子力科学研究所（以後、原科研）で実施される他の研究開発活動には先端基礎研究センターで実施されるものを含めて小規模で基礎基盤研究分野のものが多く、派手なニュースになるような成果が挙がることは少ない。

そこで先端基礎研究センター（以後、先端研）である。巻頭言の執筆を依頼されたのを機会に、既刊の基礎科学ノートを読みつつ原子力機構における先端研の存在について少し考えてみた。先端研は平成5年4月に発足した組織である。その後16年間に亘り歴代センター長の強力なリーダーシップによって世界レベルの研究を展開してきた。平成19年度の独法評価において先端基礎研究がS評価を受けたことは記憶に新しいところである。また、理事長ファンドによって実施される原子力機構内の連携・融合研究、萌芽研究等においても先端研は他部門に刺激を与え研究を活性化させる役割を果たしている。すなわち、原子力機構における先端研の存在は十分に評価できるものということになる。

しかし、正直に言えば、何か物足りない気分がある。発足当時の先端研は特別に輝いた存在であり、周りからは大きな期待を持って見られていた（ように思う）。門外漢である筆者は、研究内容を理解できないところが先端研の先端研たる所以であると妙に納得し、先端研の存在により研究所全体の知的存在感が増したと感じていたものである。存在するだけで香り付けの役割を果たしたと言える。近藤次郎先生が「先端基礎研究は新法人にとって香水の役割だよ」と仰ったと前センター長の安岡先生が紹介しておられるが（基礎科学ノート vol.13, No.2）、いかにも含蓄があり噛みしめたい言葉である。

その先端研も、発足以来月日を重ねるにつれて、特に独法化後は研究開発部門の中の一部門と位置付けられて、並の研究組織になった感がある。並の組織では、先端研の存在意義はない。センター運営陣と研究者各位には、原子力機構が中期計画の第2期目に入ろうとするこの機会に、センターは上質の香水の役割を負った特別の組織であることを再認識いただき、J-PARC 施設を含めて原子力科学研究所が50年の歴史の中で築き上げてきた研究基盤（施設と技術）を活用してステルス説打破の先頭に立ってほしいものである。